(旅)
親の心
7.24
子知らず

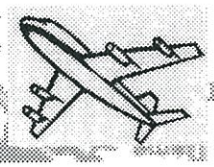
旅

7月17日　晴
ぐるぐる旅行記 インド編／ねこぐる

ぼくはインドに行ったことはありません。それどころか、海外旅行もしたことありません。だって飛行機怖いから。でも、インドを体験したことはあります。一年ほど前の話です、インドに行った友達におみやげをもらいました。茶色いハッパを筒状にしてヒモで括っただけの、タバコ（のようなもの）です。さっそく吸ってみると、不思議な味でした。あえて言うならお寺の味。お寺を吸ったことはありませんが、他に言いようがありません。これが、ぼくの唯一のインド体験です。もちろん、たったこれだけでインドがわかったとは言いません。じゃあ、このまんがを読めばインドのことがわかるのか？わかりません。というのはぼく自身インドを知らないので、わかるかわからないか、わかりません。でも、わかったような気分になることはできます。インドってこんなとこなのかなっていうイメージは掴めると思います。この中にはねこぐるさんのクールな視点から見たインドがあります。インドからネパールに歩いて行こうと思っている日本人青年を見ても「バカじゃないかしら」。火葬される遺体をまのあたりにしても「別になんの感情もわかない」。インド関連の本にありがちな「生とは何か？死とは何か？」という大げさなテーマはありません。余計なことは考えなくていい。そういうところなんですかね、インドは。（あおやぎ）

7月22日　光化学スモッグ発令中

僕は、飛行機に乗ったことがない！　もちろん外国にいったこともない。だからパスポートと聞いて思い出すのはパスポートサイズのビデオカメラなのだ。これだけ海外に気軽に行ける時代に、大学の四回にもなって海外に行ったことがないなんて逆に珍しいだろうし、実際珍しがられる。「えっ、飛行機乗ったことないん」とか「なんで海外に行かへんの？」なんてセリフはもう星の数ほど聞いてきた。そんな時僕は決まってこう言い返す。「俺にとって、日本という国が夏の太陽にギラギラしてるからサ！」（織田）



7月20日　晴れ
サニーデイサービス／サニーデイサービス

テーマは旅ということでボクが旅に持って行くならこの1枚、サニーデイサービスの4thアルバムです。そういや生まれてからこれまで旅らしい旅なんてしてないなと思いつつ時間と金があれば旅したいなと思う今日このごろ。ボクが描く旅の理想像ってのはこうなんて言うか行く当てもなくおんぼろ列車に揺られて田舎道をだらだら行くようなそんな感じの旅です。別にこれといって行きたい所なんてないし。なんとなく気構えることなくぶらっと行くのが旅なんだって勝手に思ってるから。このアルバムはそんな旅に憧れている人にお薦めです。曾我部恵一の優しく切ない歌声とどこか懐かしいメロディと。きっと列車の窓から見える風景にこのアルバムの音楽は溶け込んでくれるはずです。（ミタニヨシマサ）

7月23日　台風13号
Jazz From Hell／Frank Zappa

いいことを教えてあげましょうあなたは本物の音楽を聴いたことがありますか言ってる意味が分かりますか言い方を換えましょうかあなたは今まで一度でもFrank Zappaという人の音楽を聴いたことがありますかFrank Zappaという人は25年間の間に約70枚のアルバムで約1400曲もの音楽を世に問っていますところでもしかしてあなたはテレビやラジオから垂れ流されている音楽を聴いてそれをカラオケで歌ったりバンドで真似ったりしたりすることで満足しているのではないですか本当にそれで充足しているのなら死んでしまったらどうですかあなたが一匹ぐらいいなくなったところで世の中なんら不都合はないでしょうからしかしもしあなたがいま自分の聴いている音楽に飽き飽きしていてなにかもっと凄いものを求めて止まないのならFrank Zappaという人の音楽を聴いてみるべきでしょうそこにはおそらく今まで感じたことの無いであろう音楽世界が広がっているはずですよでもその世界を知ったとしてもあなたが一匹の虫けらであることには変りはありませんよねえそこな虫けらさんFrank Zappaの"Jazz From Hell"というレコードを聴いてごらんなさいきっとあなたも自分のG-Spotが刺激されてくるのが解るはずですよちなみにこの文章はあなたたち虫けらさんたちへの挑戦ですよもしあなたがこの文章にむかついたのならあなたの心は偏狭だしこのアルバム一枚だけを聴いて否定するつもりならあなたは唯の"しったか"でしかありませんよ好き嫌い以外の全ての批判にお応えします但しわたしは単なるプードルです悪しからず私は旅に出ますそして、（佐古）

7月23日　どこまでも（何をしようとも）晴れ
Whatever／Oasis

僕はとても眠かった。車掌さんに切符の点検で起こされてもフニャフニャしてたし、実際しばらくは眠ってた。でもふと起きて、窓の外を見たら緑、白、黄色、いや実際はそんな単純な言葉では言い表せない感動が広がってた。僕はああ、ここがアンダルシアなんだなって思った。何より強く思った。この気持ちを伝えたくて、僕は何度かシャッターを押した。列車の中から、動いている景色なんてまともに撮れるものじゃないことくらい分かってたけど、どうしても何かに残しておきたかったんだ。それで僕はまた旅の手帖を書き出した。僕は確かに眠かったが、目を閉じることがためらわれてずっと左目だけを開けていた。でもそのうち気分が高揚して、眠ることなんて忘れていたようだ。この景色を眺めているだけでもこの旅に来て良かったと思え、僕は落ち着きながらわくわくしていた。地平線が見えた。地平線の向こうまで畑。これがひまわり？ ひまわりはこの時期どういう状態なんだろう。花だ。白い。ところどころ黄色い。そこら中ずっと花。絵みたいだった。なぜか頭の中に「メランコリーそして終わりのない悲しみ」が流れ、僕は懐かしくなった。ため息を一つ。馬が駅で草を食べてた。いい気持ちだった。このまま一日がすぎても僕は一向に構わないと思ってた。（やまぐち）

7月22日　"しとしと・・・"
ANGUNN／ ANGUNN

今まで音楽を聴いて旅に出たくなったことってありませんか？私のオススメはすぐにインドネシアへ行ってみたくなること請け合いのこの一枚。アングン（インドネシアの首都ジャカルタ生まれで現在パリ在住の24歳）のインターナショナル・デビュー・アルバム。私の大好きな"低めハスキー・ボイス"とエキゾチックな香り漂う曲の雰囲気で、聴いていると気持ちがリラックスしてきます。それはもうアロマ・テラピー並み！！雨がしとしと降ってる音をバックに聴きたくなってしまうようなバラード多し。また、David Bowieの「Life On Mars」なんていう意外なカヴァーなんかもあって、これはホントいろんな人にじっくり聴いて欲しい一枚だなぁ。（さかた）

7月22日　晴れのち晴れ

1990年。まだ僕が中学生の頃、ヨーロッパの小さな国では世界最大のイベントが行われた。その名はイタリアワールドカップ。決勝リーグ1回戦、ブラジルのDFに囲まれたマラドーナがブロンドの長髪をなびかせるカニージャに芸術的なパスを送ったシーンがとても印象的だった。そして1998年6月15日、サッカー日本代表チームはフランスワールドカップでアルゼンチンと戦った。それから10日後、僕はリヨンのジェルランスタジアムに立っていた。ワールドカップの舞台で流れる"君が代"を聞きながら、僕は日本人であることを誇らしく思える一瞬を味わった。しかし試合後、その感情はやりきれない悔しさに変わった。4年後の活躍を祈りながら僕はスタジアムを後にした。

この旅にはもう一つの目的があった。それはパリで最古の橋を見に行くことである。何年か前に"ポンヌフの恋人"という映画を見て以来、ずっとそのイメージが記憶の片隅に引っかかっていた。現在のポンヌフ橋は僕がイメージしていたよりもずっと奇麗だった。改築工事を経て、すっかり様変りしていた。しかしジュリエット・ビノシュが絵を描いたシテ島の先端には、映画で見た木が確かに存在していた。

この原稿を書いた日にパリから一通の絵葉書が届いた。リヨンからパリに戻るTGVで出会った一人の日本人画家からである。それは僕が体験したフランスの思い出を呼び覚ますものだった。いつの日かまたこの景色に会いに行きたい。（浜崎）

7月23日　雨
Be Here Now／Oasis

2月某日、俺は愛車BMW525に乗り、Oasisの「Be Here Now」を大音量でかけながら関空へ向かって雨の中、高速を飛ばしていた。そう。帰国する彼女を向かえに。彼女が日本を離れて3週間。でもその3週間は俺には3ヵ月ぐらいに思えた。日本から地球の裏側の異国の地へ。彼女はそこでどんな思いで過ごしていたのだろうか。俺は彼女から手紙が来るのを待ちわびては、時間を忘れるために忙しい生活を送った。3週間後には「She will be here now.」。
そして彼女は帰ってきたんだ。（たくや）

7月10日
男と女／クロード・ルルーシュ監督

男性にひとこと「愛してる」と電報が送れますか？　その電報を800キロ離れたところで受け取って、即座に車を一晩中飛ばしてその女性のところに向かえますか？　ホテルの1階のレストランに女性と食事に行って、「追加注文はございませんか？」と給仕の人に尋ねられて、料理の追加注文をするかのように「部屋をお願いします」と言えますか？　やはり昔の男が忘れられないからと、喧嘩して列車で帰ると言い出した女性。車をぶっ飛ばして到着駅に先回りして、列車から降りてきたその女性をホームで迎えられますか？このすべてのシチュエーションがボサノバのリズムに乗って具現化された信じられないような作品が『男と女』だ。

だーばだ・だばだばだ、ノルマンディの海岸、だばだばだ、クロード・ルルーシュ監督、だーばだ・だばだばだ・だばだばだ、1966年、だーばだ・だばだばだ・だばだばだ、カンヌ映画祭、だーばだーだー、グランプリ、だーばだだー...（中略）...だーばーだ・だばだばだ・だばだばだ、アヌーク・エメ、だーだー・だばだばだ・だばだばだ、ピエール・バルー、だーだー、だばだばだ・だばだばだ、トランティニャン、だーだー、だばだばだ、モンテカルロ・ラリー、だばだばだ、駅のホームで、だーだーだーだ。
（かつゆき）

7月18日　昼ごろ　雨のちくもり所により晴
ダブルキャスト／SCE

主人公が記憶喪失、というゲームがある。主人公もプレイヤーもゲーム内世界についての記憶がないという点で、比較的、主人公になりきりやすい設定である。

このゲームにも記憶喪失の人物が登場する。が、それは主人公「僕」とは別の女の子だ。しかも、「僕」と彼女との出会いには無理がある。クラブの飲み会で泥酔しゴミ捨て場に倒れ込んだ「僕」は見知らぬ女の子に助けられる。気が付いた「僕」はお世話になったお礼だとコーヒーをおごる。そこで彼女が記憶喪失だと知り、病院にも警察にも行きたがらぬ彼女に、「僕」は「だったら僕のとこへ来ない？」と言い、それが成立してしまう。普通なら、この時点では「僕」になりきることなど不可能だ。

マルチエンディングのこのゲーム、一回目のプレイでベストエンディングにたどり着ける事は、まずない。たいてい、その女の子に鈍器でメッタ打ちにされるか、刃物で刺されるかして殺されて終わる。だがここでプレイヤーは、完全に「僕」と同調している自分に気付く。メッタ打ちにされながら「僕」は言う。「なんで、なんで殺るんだ？」プレイヤーは思う。「この間は泣いて抱きついてきたじゃないか」「俺、なにか悪い事したか？」

かくしてプレイヤーは、彼女の記憶を求め、再び旅立つこととなる。それは実らせることのできなかった恋の幻影を求める、自らの旅でもあるのだが。暇とプレステのある人は是非。（よこひたかひこ）

7月16日　8：22　蟹座

先日、知人がイギリス留学に旅立った。こちらとしては立派な英国紳士になって帰ってきてくれることを願っているのだが、彼は私の知る限りサムライでもニンジャでもないのでオックスフォードの人々にとってはいささか物足りないかもしれない。まあ、情報化の時代とはいっても所詮こんなものである。陰気なイタリア人もいればセンスの悪いフランス人もいることはいうまでもない。けれども他人の顔を覚えるときにはまず相手の特徴的な部分に着目してしまうのは仕方のないことなのだろう。

「君は空手をやるのか。」
「ああ。強いよ。」
「じゃあ戦ってみよう。」
「あいにくだが私闘は禁じられているんだ。」

別の知人がアメリカで交わした会話だそうである。旅行好きの彼が言うには外国では日本人といえば空手という連想をよくされるらしい。だが私にはジョークがジョークを呼ぶ、小粋な会話への手がかりに思えてならないのである。そう考えればあいつはスキヤキとテンプラばかり食ってる奴だと思われても、いちいち目くじらを立てることはなくなるだろう。つまり真の国際化と相互理解に必要なのは心のゆとりなのだ。そしてそれは突きつめればチョンマゲのヅラが命運を握っているといっても過言である。(安養寺)

free fare
The Time Of Departure : 1998.7.24.Fri
Conductor : TOmohiroYAmaguchi　TOmokoYAsumura
Special Thanx : TEtsuoAOyagi　NAokoYAmaguchi　TAkahikoYOkoi　YUkikoITou　AYakoYAginuma
Station : Brainstorm（Kansai University Takatsuki Campus Music Circle）

information

みなさん、ご機嫌、うるわしゅう。うるわしゅう。

たびはWEB版「親の心CO'知らズ（仮名）」を作成中です。詳細は次号を待って。

テーマ（カレー、恋愛、「ありがとう」、声、矢印、写真、夏）などについて原稿を募集しています。それぞれのテーマに関する音楽、映画、本のレビューやコラム、その他全画などなどを募集します。ご感想、ご意見、お問い合わせはJUN智太(tomo-hiroes@pop16.odn.ne.jp)、住所：尼崎市西長洲町2-25-10まで。採用させていただく場合は、折り返しこちらからご連絡いたします。

次回のテーマはきっと「カレー」です。9月始めを予定しております。楽う御期待。

今回もたくさんのカキコに協力いただきました。どうもありがとうございました。

おはよう。さよなら。おはよう。さよなら。何にも知らないふりして今日を生きよう。それだけさ。